

# オノマトペを用いたダンス指導の有効性

藪井琴子（岡山大学大学院）

## 1. 背景及び目的

運動指導者は学習者に運動指導を行う際、しばしばオノマトペ（擬音語・擬態語）を使用する。オノマトペを運動指導に用いることで、通常の言葉では表現しにくい微妙な感覚印象やイメージを端的に言い表すことができ（吉川, 2009）、学習者も感覚情報を音のリズムにより、直観的に理解することができる（藤野ほか, 2005）ことが明らかとなっている。

ダンス指導においても、オノマトペの有効性を質的手法によって明らかにした研究（生関, 2018）や、幼児を対象としてオノマトペが喚起する心的イメージ/身体表象の関連の検討を試みた、村瀬・寺山の研究（2020）などが挙げられる。しかしながら、オノマトペを用いることの効果を量的手法によって検証を試みた研究は、管見の限り見当たらなかった。

### [第一の実験研究]

そこで本研究者は、ダンス指導におけるオノマトペを用いることの影響を見る第一の研究として、＜関心・意欲・態度＞、＜主観的運動強度＞、＜学習効率＞という3つの視点から、その効果性についての検証を行った（藪井, 2020）。その結果、＜関心・意欲・態度＞に関する3項目、＜学習効率＞に関する3項目において、オノマトペ有りの指導の方が平均得点が有意に高い結果となり（ $p<.05^*$ ）、学習者に肯定的な影響を与えることが明らかとなった。

### [第二の実験研究へ]

上記の実験研究に取り組んだ結果、一定の成果を得られたものの、その実験プロセスについての課題が浮上した。実験では、指導者がオノマトペを用いた複数回の実践を繰り返すことが必要であった。しかし、オノマトペ指導の提示の仕方が生身の身体による実践であったために、微細なズレが生じ、完全に同一の実験素材となり得ていなかった。この課題を受けて、オノマトペの提示の仕方をより厳密にするべく、実験素材を生身の身体ではなく、映像を用いた手法によって行う第二の実験研究に取り組むこととした。

以上より、本研究では、映像による実験素材の提示を用いたオンライン実験を実施し、オノマトペを用いたダンス指導の有効性を検討する。

## 2. 研究方法

1) 研究期間：2021年11月

2) 対象者：O大学に所属している学生61名

3) 手続き：【第1段階】実験対象者を、①ダンス経験の有無、②ダンスへの態度（好感度・抵抗感・羞恥心）の二つの観点から2群に分けた。【第2段階】一方の群を「オノマトペ有り群」、もう一方の群を「オノマトペ無し群」とし、実験素材を映像としたオンラインによる実験を行った。【第3段階】学習後に、＜関心・意欲・態度＞＜運動強度＞＜学習効率＞の観点から計10項目、7件法による質問紙調査を実施した。その後、各質問項目におけるオノマトペ有り群、オノマトペ無し群の平均得点の差について対応のあるt検定を行った。

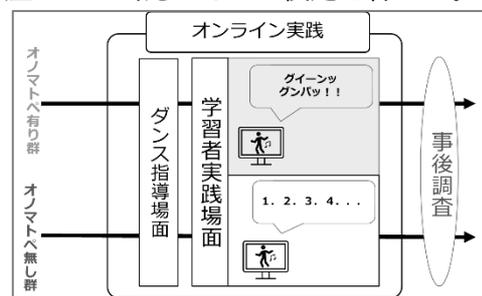


図1 実験手順

## 3. 結果と考察

1) ＜関心・意欲・態度＞

指導者の親しみやすさの項目においてオノマトペ有り群の方が平均得点が有意に高い傾向が見られ（ $p<.10^+$ ）、学習者に肯定的な影響を与えることが明らかになった。

2) ＜学習効率＞

動きの見本の分かりやすさの項目においては、オノマトペ有り群の方が平均得点が有意に高い結果となり（ $p<.05^*$ ）、学習者に肯定的な影響を与えることが明らかになった。オノマトペの端的な言葉で運動感覚を的確に学習者に伝え、記憶に強く働きかける機能が今回の結果が出た理由の1つとして考えられる。

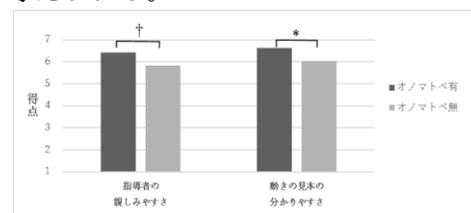


図2 分析結果 注) † $p<.10$  \* $p<.05$ 、

以上のことから、ダンス指導にオノマトペを用いることで、＜関心・意欲・態度＞の1項目、＜学習効率＞の1項目において、学習者に肯定的な影響を与えることが明らかになった。

（引用・参考）藪井琴子（2020）、オノマトペを用いたダンス指導の有効性の検討。卒業論文、岡山大学。